

Topic 1

合格体験記 喜びの声&後輩へのアドバイス

平井 彼方くん

- 合格大学：東京福祉大学 教育学部 教育学科
- 学校名：都立光丘高校
- 校舎名：小竹向原校



● 合格を手にしたの感想

塾にはきちんと行っていたものの、家ではほとんど勉強しなかったため、家でもっと勉強していればよかったと反省が残ります。また、大学受験の準備は早めにしておいた方が絶対に良いです。合格できて良かったです。

● 将来の夢や目標は？

将来は小学校の先生になりたいです。きっかけは中学校の先生でした。大学では教師になるための知識を身につけ、実習に取り組み、力をつけていきたいです。

● 大学を選んだきっかけは？

実習以外に教職ボランティアという教員体験ができるボランティアがあったからです。また、自宅から近く通うのに便利が良いことと、就職率が高いため、選びました。

● 俊英館に通塾して良かったところは？

小論文の講座がとてもわかりやすかったです。また、WEB授業は、自分のペースで勉強できて、分からないところは先生に聞けるので、とても良いと思いました。

● 後輩へのアドバイス

1, 2年生のうちから、勉強をしっかりした方が良いです。なるべく早くから定期テスト勉強に取りかかった方が良いです。あとで勉強しようと思っても勉強しないで終わってしまうことがあります。部活があるなしにかかわらず、いつも定期テスト勉強という気持ちで取り組んだ方が良いです。また、WEB授業を自分のペースで受けていると遅れてしまうことがあると思うので、計画的に取り組むことが重要です。計画的に取り組むことができれば、必ず成績は上がります。

推薦入試合格内定の報告

高1・高2の皆さんも、学科試験を受けずに、この時期に大学に合格内定するコツを学んでください。

■早稲田大学 創造理工学部 S・Hくん

クラスのライバルと競いました。どちらが1位をとるか、部活がある時も塾に行って最後まで勉強しました。

■学習院大学 法学部 H・Mくん

塾の先生から指定校推薦を狙うように中3の3月に言われ、勉強を続けました。特別なことはしませんでした。良い成績が取れていたため、やる気も継続しました。

■日本大学 文理学部 T・Hくん

内部進学でしたが、第一志望の学部学科に進学が決まって良かったです。高2のときに成績が振るわず、希望の学科に行けるかどうか不安でした。合格するための成績がどのくらいで、どの教科をどれだけ上げればよいのかを先生と相談した後は、気持ちが楽になりました。やるしかないという覚悟もできました。本当にありがとうございました。

高3生はこの時期、模擬テストの合格判定が現実味を帯びてきて、併願校を具体的に決定していく時期になります。いままでは憧れの第一志望のみを「志望校」としてきた人も、**併願校を適切に決めることによって、第一志望校合格の可能性も高まってきます**。以下のポイントをチェックして、自分にとって最適な併願校を決定してください。

◆ 受験校のレベルを適切に選ぶ

特別の事情がない限り、「国立大学しか受けない」とか「早稲田一本のみ」といった受験の仕方は避けましょう。模擬テストの合格判定から、安全校（A・B判定の大学）、実力相応校（B・C判定）、挑戦校（C・D判定）をそれぞれ決めましょう。安全校を2校、実力相応校を3校、挑戦校を4校受けると9校を受験することになり、合格の可能性はぐっと高まります。現役生は、模擬テストが終了する12月以降も実力は上昇するもの。C・D判定の大学学部を多めに受けておくのが戦略的にもベターです。

◆ 入試科目の確認と決定

併願校でしか使用しない入試科目があると、勉強の効率は落ちます。第一志望でしか受験しない科目であればやる気も起きますが、前者の場合は、勉強にかける時間も少なくなり、得点率が低くなりがちです。第一志望に合格するために、その科目がどれほど必要なのか考え、思い切って捨ててしまう（併願校を変更する）のも一策です。「第二志望の大学にだけ、古典が必要」などという時は、古典の必要のない大学学部を他に探すのがよいでしょう。

◆ 受験校カレンダーの作成

連続受験は予想以上に体力を消耗します。朝早くから1日ばかりで受験し、翌日の準備などで追われ、集中した勉強時間が取れません。それが4日も続くと、学力さえも落ちてしまいます。3日連続が限度と考えましょう。その際も、3日目に第一志望を受験するスケジュールは避けましょう。

また、第一志望がその年の受験の1回目というのもよくありません。思わぬハプニングや極度の緊張から、実力が出し切れないことが多々あります。第一志望の受験の前に、すでに1度受験を経験していることが必ずアドバンテージとなります。「受験校カレンダー」は高校で提出を求められることもあります。そうでなくとも自ら作成して、ベストを尽くせるよう準備に万全を期しましょう。



1 国立大の「文系廃止」の誤解はなぜ広がったのか？

文部科学省が6月に国立大学向けに出した人文系の組織再編を促す通知の波紋がなかなか収まらない。問題の通知「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」を目にした国立大の人文系教員たちから「人文系軽視だ」などと不満が噴出。特に、教員養成系学部については、18歳人口の減少を背景に、教員免許取得を卒業条件としない、いわゆる「ゼロ免課程」の廃止が盛り込まれた。ただ、通知ではその前提部分を省略したため、あたかも人文社会系学部までが廃止対象に含まれるように解釈されたのだ。同省は「人文系切り捨てではない」と理解を求めると、学術団体が7月に抗議声明を発表し、8月には一部の英字紙が「日本の大学が教養教育を放棄へ」と海外で発信した。文部科学省は「文系軽視は誤解」と火消しに躍起になっているが、果たして“誤解”は払拭されるのか。



2 国公立 157 大学の最新難易度 理高文低から理低文高へ

今春の入試では、文系人気の復活、新課程によるセンター試験での得点調整など、さまざまな異変があった。来年度入試では、東大の推薦入試、京大の特色入試などが他大学の一般入試にも大きな影響を与えそうだ。新課程2年目となる来年度入試はどうなっていくのか。

今年の入試の大きな動きは、学部人気が一変したことだ。これまでの理系の人気が高く、文系の人気が低い“理高文低”に終止符が打たれた。代わって真逆の“理低文高”となり、文系人気があっただけでなく、予備校関係者はこう話す。「文系人気は来年も続きそうです。法、経済、経営、商など社会科学系学部の人気があっただけでなく、景気回復で文系の就職率が改善されたことが、人気の理由です。一方、理系は人気下がっており、リケジヨ（理科系女子）も減少しています。」とのこと。

サンデー毎日と大学通信が調査している今年就職状況を見ても、文系の就職率改善は明らかだ。実就職率（就職者数÷〈卒業生－大学院進学者数〉×100）で比較すると、法は2014年度は77%だったが、今年度は80.7%にアップ。同様に、文・人文・外国語は76.4%→80.7%、経済は80.7%→83.9%、商・経営は81.7%→84.8%、国際系は78.5%→82.6%など、昨年と比べてどの学部系統も4%近くか、それ以上に伸びている。

では、人気が頭打ちの理系はどうなのだろうか。就職面が悪いのかということとそんなことはない。文系と同じように見ていくと、農は84.1%→86.8%、薬は82.6%→79.7%、看護・保健・医療系は91.6%→91.8%、理工系は85.7%→89.3%となっている。薬を除いて、実就職率はいずれも文系を上回っているが、伸び幅が文系ほど大きくはない。「グローバル化が進む中、文系学部の人気が上がっているのではないか。」「国際・語学系志願者が増えると予測されているが、入学後のカリキュラムを把握せずに安易に決めてしまうと、ついていけない苦しむことになるのでは？」といった声があがっている。



3 センター試験 過去最高 693 大が参加

大学入試センターは、8月28日、2016年度入試から、センター試験に新たに参加する大学について発表した。新たに参加する4大学を含め、センター試験に参加する大学は過去最高の693大学となった。

大学入試センターによると、2016年度入試から大学入試センター試験に参加する大学は4大学8学部。参加する大学は、それぞれ人間環境大学、梅花女子大学、鳥取看護大学、湘南医療大学。そのほか、一部の学部で既に参加しているが、他学部が新たに参加する大学は20大学20学部。なお、東京理科大学は工学部第二部の学生募集を停止することから、同学部第二部のセンター試験への参加を取り止める。参加自体を取り止める大学はなかった。なお、短期大学は昨年比で3短大減の157短期大学が参加する。



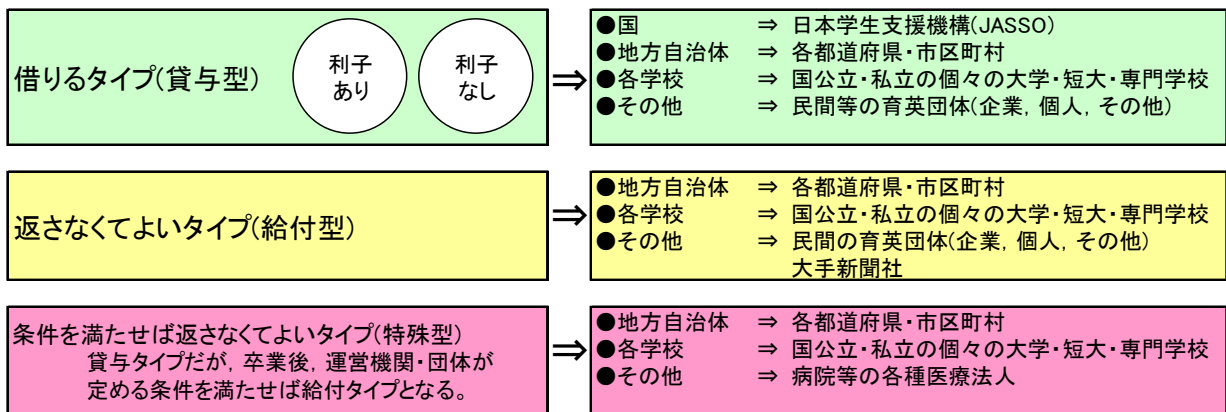
■ 「貸与型」と「給付型」の2タイプの奨学金

奨学金制度のあらましを紹介するにあたり、最初に押さえておくべきポイントは、そのタイプが大きく分けて2つあるということだ。

1つは、学生時代に受け取った奨学金を、大学を卒業した後、全額(場合によっては利息も)返していかなければならない「貸与型」。もう1つは、返す必要がない、つまり全額もらえる「給付型」。当然ながら、「給付型」のほうが「貸与型」よりおトクだ。

さらに、「貸与型」を細かく見ておくと、返す際に利息がつくものと、つかないものの2タイプがある。もちろん、他のローン等に比べ、その利息はかなり低い、それでも利息なしのほうがおトクだし、人気も高い。

奨学金の種類とおもな運営団体・機関



■ 日本学生支援機構は「貸与型」

現状では、日本学生支援機構の制度が「貸与型」ということもあり、日本国内で実施されている奨学金の利用者の約9割が「貸与型」であり、「給付型」を利用できる人数はまだまだ少ない。

「貸与型」は、利用した後は受け取った全額を返還しなければならない。つまり、このタイプを利用すると、将来的にかなりな額の借金を自ら背負うことになる。これが「貸与型」のデメリットともいえる。

ここ数年、新聞やテレビで報じられるように、大学卒業後に、なかなか就職が決まらない人もいるし、就職しても非正規雇用で、不安定な立場に立たされている人も多い。低賃金だったり、就職先が倒産したりするなどで、日本学生支援機構の奨学金を返還できない人が急増し、社会問題になっている。

その点、「給付型」は返還しなくてもよいので、このような心配はない。しかし、「給付型」の奨学金を受けるには、高校における学業成績や、入学試験の成績、さらには入学後の成績が優秀であることや、家庭の経済状況の審査など、厳しい条件がある。募集人員も少なく、「狭き門」であることがデメリットとなっている。

